

開府 名古屋の都市づくり

— 家康の考えたこと —



池田 誠一

【8】碁盤割…都市名古屋への目線

1 正面の町人町

城の正面の一等地は町人の町とされました。以前に近江八幡の城下で紹介したように、当時としては特に珍しいものではありません。江戸城も、大手門の方向、今の大手町や日本橋は町人町です。城下に人が集まり、繁栄するかどうかは町人の活動にかかっており、魅力的な居住条件を提供することが必要だったのです。城も、そして町も、もう、戦さのためではなくなっていました。

名古屋城下の町人町は、戦国時代の他の町

と比べると、当初から大きく、きちっとした形が整えられました。正方形に区画された、「正々方々」とよばれる町人町は、東西11町、南北8町余になり、城の正面に整然と並んだのです(図1)。今回はこの「碁盤割」と呼ばれた城下正面の町人町を見てみたいと思います。

2 町割と宅地割

(1)都市の町割

都市計画の基本となる町割には古代の都城の例があります。その割り方は、平安京など、碁盤割区画の1辺が40丈、約120mの正方形でした。しかし戦国時代の城下町では矩形が多く、城下の地形や街道の位置に合わせて適宜配置されています。

正方形、いわゆる「正々方々」型が採られたのは、天下を志向した秀吉の大坂、そして家康の江戸や駿府の城下でした。江戸の町では平安京と同じ1区画40丈(400尺=121.2m)が採用されています。ただ町人町全体の区域は城の周りに細く帯状になっており、平安京

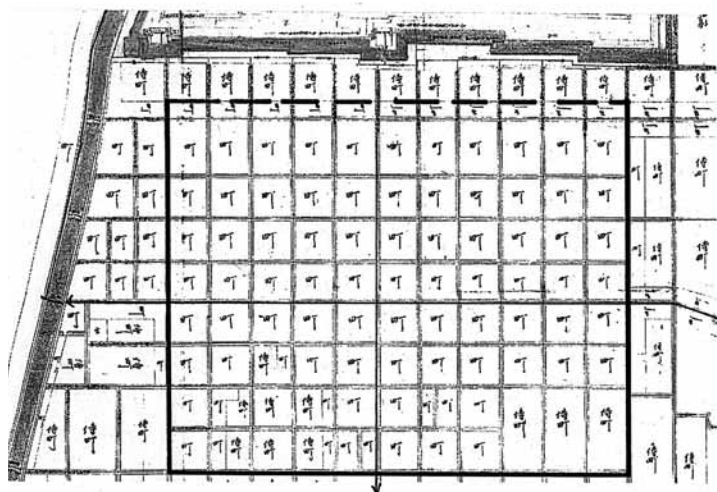


図1 名古屋城下の碁盤割区域。「町」は町人の町(正保名古屋城絵図)

のような碁盤割にはなっていません。

この町割の正方形の大きさを巡っては、ややこしい議論があります。というのは、

【A】：一辺の長さを、

- ①道路の中心間でみるか(心々説)、
- ②宅地の角から角でみるか(内法説)、

【B】：寸法の表示を、

- ③田舎間(6尺 $\div$ 1.82 ㍎)とするか、
- ④京間(6.5尺 $\div$ 1.97 ㍎)とするか、

という点です。中でもBの田舎間、京間は、古来の条里制の6尺と建築の柱間での6.5尺が共存しており、また当時は6.3尺、6.25尺など様々な検地尺も存在しました。時代的に移行期だったこともあって、この問題は一筋縄ではいかない難しさがあります。一応、大坂は京間40間、江戸は京間60間とされたようですが、江戸の町割でもまだ京間と田舎間の議論が残っています。

(2)名古屋の碁盤割

名古屋の碁盤割の町割は、従来から道路中心間(①)で、田舎間(③)の60間正々方々とされてきました。しかし昭和40年代にそれを否定するような新しい説が登場したのです。その説は、宅地の角角(内法、②)で、京間(④)の50間正々方々ではないかとするものです。道路幅は共に、一応、3間とされました。

従来の説は、戦前に提案されたもので、どちらかという実測値に根拠を置くものでした。それに対して新しい説は、江戸時代の文献から宅地割の総幅を復元して50間という値を求めました。計算上での長さは道路中心間で、従来説は109.1 ㍎ 、新説では道路を3間として104.4 ㍎ になります。

素朴に考えると、これだけ差があれば、現存する道路中心間距離を一大きく変更されていないため一測れば解決しそうに思えます。残念ながらその測定を精密に行うことは出来ません。しかし、東西、南北の数街区を取って図上で概測してみると、道路中心間は平均106~109 ㍎ の間にほぼ納まるのです。従来の計測でも同じ傾向があり、従來說に分があることになります。ただ道路幅が、当初は4間であったとする図面(前回、文献③)が発見されており、差はもう少し縮まるかも知れません。ひょっとすると、道路の骨格線は田舎間60間で、内法は課税の関係や後世の事情で京間50間とされた可能性もあるのではないでし

ょうか。いずれにしろ今後の議論を待たねばなりません。

(3)宅地割

では、その正方形の街区はどう区画されたのでしょうか。この割り方には古代からの①四行八門型、江戸の②三行中空型がありました。名古屋は正方形がすこし小さかったため、③三行中空型を改良した「キネ型」と呼ばれる割り方が採用されたようです(図2)。②、③の割り方では中央に空間が生じます。これは「会所」、名古屋ではすこし訛

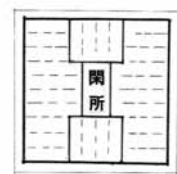
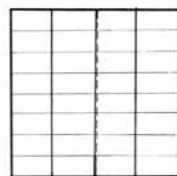


図2 宅地割の例。名古屋はいちばん下のキネ型になった
四行八門型
三行中空型
キネ型

って「閑所」と呼ばれました。始めは準公共空間でしたが次第に寺院が多く設けられています。

町の配置については、「縦町」、「横町」ということが関連してきます。縦町とは城からの出入の線を中心にした町、横町とは街道等それに交差する方向を中心にする町です。これは街をつくるに当たってどちらを重視するかによって決まります。全国的に見ると、始めは縦町型だったものが次第に横町型に変わっていったとされます。名古屋は街道(美濃路、本町通)が碁盤割内で曲ったためミックス型になっています(図3)。

以上のようにみえてくると、名古屋は古代都城以来の正々方々を志向し、それは大坂、江戸と並ぶものでした。さらに城下正面には江戸では出来なかった東西、南北のきっちとした碁盤割の町をつくりました。新しい名古屋城下の都市づくり。家康の視線はきわめて高いものだったといえそうです。



3 紀行 碁盤割の町

… 正面の町人町跡を歩く …

碁盤割地区は第2次大戦で大きな被害を受

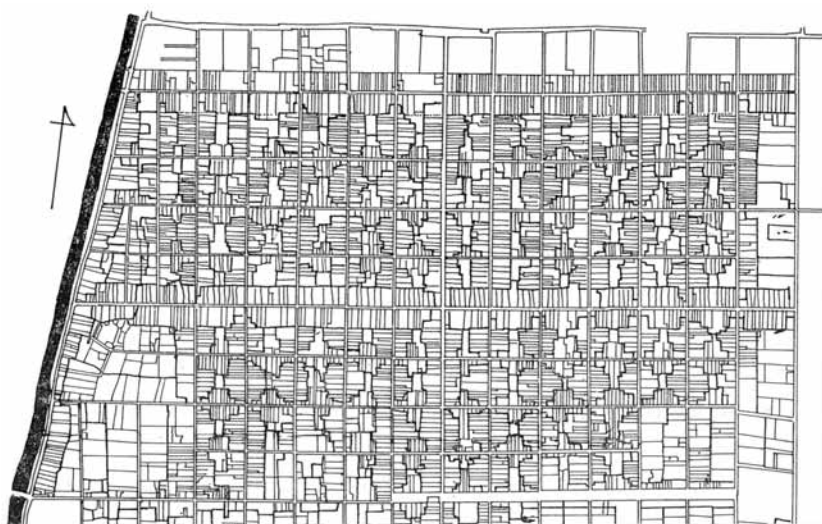


図3 基盤割地区の宅地割の実際(明治中頃)。
京町筋と伝馬町筋は家並が南北を向いている

行くとすぐ外堀通になります。ここが城の三の丸と城下町との境目で、正面には御園門がありました。

外堀通は三の丸の堀(外堀)に沿う通りで、この南側の堀沿いは藩の機関や上級武士の屋敷が並んでいました。従って本当の基盤割の町人町の角はそこから南に50間ほど行った

けました。しかしその復興に当って拡幅はされましたが町割は踏襲され、現代に引き継がれることになりました。今回は、この名古屋の基盤割の街を歩いてみます。

〈西北・御園通から〉

地下鉄鶴舞線丸の内駅を降り、8番出口を出ます。伏見通の次の角を西に入ると、次の通りが基盤割の西端御園通です。通りを右に

たところになります。東に信号を渡り外堀通を進むと右側にまとまった緑が見えてきます。その手前を右に入ると左は東照宮です。初代藩主義直が家康をまつたもので、三の丸からここに移されました。建物は戦災で焼けましたが、その後、義直の正室春姫の霊廟の建物が移されています。隣はこれも三の丸から移された那古野神社です。この一角は藩の学問所、明倫堂等があった所です。東に通って



基盤割西端の御園通。けっこう凹凸があるのが分る



家康をまつた東照宮



外堀通。高速道路が空を覆っている



本町通と京町筋の交点。有名商家が角地をしめた

ぎて右に曲ると次の道が京町筋になります。

東に一本目が本町通です。この角は碁盤割地内で最高の地位をしめる場所でした。角には政商茶屋家や少し遅れましたが松坂屋の伊藤家が店を構えていました。角を曲り、本町通を進みます、桜通の次の角は、前日も通った札の辻です。

〈東南・久屋通へ〉

札の辻は、碁盤割地区の中心であり、四方に街道が通されていました。ここの一本南を少し西にいった北側にある福生院は、正方形の宅地割の特徴である閑所らしさを残す数少ない所です。札の辻に戻って、伝馬町通を東に進みます。戦災復興では碁盤割の道路は、幹線道路以外は幅20^{ポル}と15^{ポル}が交互になっています。地名は消えましたが、かろうじて通り名が各街区に示されました。

大津通を越えると次は百米道路です。この広幅員道路は碁盤割の1区画を抜いた形でつくられました。入ると、テレビ塔の東北に大きな石碑があります。ここは伝馬町筋の南側にあたり、芭蕉が自らの句風を確立したとされる所です。1684年、野水宅で開かれた句会。それは芭蕉俳諧七部集の第一、「冬の日」の最初を飾るものとなりました。その東の通りは碁盤割の東端、久屋町通です。



わずかに残った閑所らしい空間。お聖天の福生院



芭蕉発祥の地。

中央の合わさった石にそのときの連句が刻まれている



碁盤割の東端、久屋通りがあったところ。

今は名古屋を代表する通りの歩道に

碁盤割の絵図を見ると、この南の2区画は侍町になっています。このような侍町は本町の西にもありました。碁盤割は町人町としながら侍町がある事はおかしな感じがします。その事情はよく分りませんが、気が付くのは、西北部、碁盤割の外側に町人の町があることです。それは10区画程度で、碁盤割内の侍町とほぼ同じです。そこは新しく出来た堀川と碁盤割の間の、いわば商人にとって一等地でした。計画的に交換されたのかもかもしれません。久屋大通の東側の歩道を進むと中日ビルの前が碁盤割の東南端になります。

4 家康の検分

碁盤割は南北8町余としましたが、よく見ると北端の街区は正方形にはなっていません。実は、1612年徳川家康が城下の町割を検分した時、三の丸の堀と町人町との間が広すぎると注文がついたようです。

「神君御巡覧之節 外片端広ク

御上意二不叶 広キハ不繁盛ニテ…」と。

道が広すぎではいけないと、町割を修正させたのです。これを調整するため、北の2街区はそれぞれ20間ほど拡がることになりました。隔離するよりも城下の繁栄を大切にした家康。ちょっとしたところに家康の哲学を垣間見ることができます。

〈主な参考文献〉

- ①水谷盛光「名古屋城下町碁盤割の形成尺度考説」(1965、『郷土文化』82, 83)
- ②水野時二『条里制の歴史地理学的研究』(1971、大明堂)
- ③水谷盛光『城下町名古屋と維新の尾張徳川家周辺』(1977、文化財叢書72号)
- ④鈴木理生『幻の江戸百年』(1991、筑摩書房)